
「好き」の意味

kanami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「好き」の意味

【Nコード】

N5424F

【作者名】

kanami

【あらすじ】

高校2年生の空^{そら}は、ある日転校生の陸^{りく}と出会う。陸と空は、出会ったその日に恋人同士？？だが、陸は空を奴隷として扱い始めた。しかし、陸が空に奴隷扱いにしたのは、深い理由があった。恐怖を乗り越え、友人に助けられて知った2人の思いとは？

1 出会い

チリリリリ・・・チリリリリ・・・

「空！起きなさい！！」はいはい。起きますよ。

「はい。」私、森山空。もりやまそら今日から、高校2年生になるんです。私は、重たい体をベッドから起こすと、制服に袖を通して急いで玄関を出た。――学校の校門に着いたとたん・・・

「空！！！！おはよう。今年もクラス一緒だよッ！！」

「キヤー！ホント？？やったねーへへ」と、私に飛びかかって来たこの可愛らしい女の子は、私の親友。かねしろあき金城亜紀。亜紀とは、小さい頃からずっと仲良しで、高校も2人合格しようと約束し、私はなんとかギリギリ合格。そんな訳で、私たちはこうして今でも仲良しでいる。私たちは、2年3組。亜紀とクラスへ向かっている途中、私たちのことを横目で見ながら、見知らぬ男子が通って行った。スタイルが良く、顔も超ーイケメン！！誰なんだろ・・・私が考えていると、亜紀が1人で盛り上がっていた。

「えっ？なにあの子！超ーイケメンへへ絶対スポーツ万能だよ！」
亜紀はイケメンを見ると、すぐ興奮してしまう。

「亜紀！そんなこと言ってる、優くんにはヤキモチ焼かれちゃうよ！」
「あっ！優くんというのは、亜紀の彼氏。優くんは、高校3年生。陸上部でキャプテンをしている。だから、待つのが苦手な亜紀は、いつも私と帰っている。だからかな・・・やっぱ、寂しいのかも。そんなことを考えていると・・・」

「いいもん。最近かまってくれないし・・・。それより、空も早く彼氏作ってよ！Wデートできないじゃん！」
「おいおい・・・。人の気もしらないで・・・。私だって、彼氏ぐらいほしいに決まってい

る。だけど、亜紀みたいに可愛くないし、作ろうと思ってもなかなかできないのが、現実なのだ・・・。

「それよりさっ！さっきのイケメン君、誰なんだろうね。」私は、頑張って話をそらした。

「本当だね！転校生なんじゃない？」やっぱり亜紀も気になっていたのか、話にくっついてきた。

「私たちのクラスだと、いいんだけどなく！」私たちはこんな他愛のない話をしながら、HRが始まる直前に教室に入った。

2 運命？？

先生が入って来ると同時に、みんな自分の席に着いた。

「あれ？」ふと、わたしの隣の見ると、席が1つ空いていた。なんで？まさか休み？そんなことを考えていると・・・。

「今年は、このクラスに転校生が来たぞ！大沢！入っているぞ。」ガラガラガラ・・・

「失礼します。」ドアが開くと同時に、教室中がざわめいた。前列に座っている亜紀が後列に座っている私を見て、驚いた顔をしている。そりゃ驚くよ・・・。だってその人は・・・

「大沢陸です。よろしくお願いします。」と、クールに挨拶をしたこの人・・・。それは朝、廊下ですれ違ったイケメン君！女子はイケメン君・・・いや、大沢くんを見て

「「キヤーキヤー」」言っている。

「大沢、森山の横に座れ。」えっ？横？緊張するじゃないですか・・・。先生が言ったとたん、女子はうらやましそうな目で私を見ていた。わお！やばいな・・・。いやいや、リラックス、リラックス・・・。そんな女子を見ながら、男子は呆れた顔で見っていた。そんなことを考えていると・・・。

「よろしくなッッ！」ーッーッ！！！！！！！

「よろしくです。」てんぱっていることを知られたくなかったから、クールに答えようとしたが、逆効果だった……。亜紀がこつちを見て

「ヒューヒュー」っと口パクで言っているのが分かった。私は、思わず亜紀を睨んだ。

「ねえねえ。」大沢くんが、また話しかけてきた。

「なに？」今度は、クールに言えた^^

「放課後、学校案内してくれない？」

「あたしが？」そうだよッ！もし私が大沢くんと一緒に歩いているところを女子に見られたら……。なんて考えるだけで、体がゾクツとした……。

「ダメ？やっぱ迷惑だよね。」本当は行きたい……。でも……。
「いいよ……。」思わず出た言葉だった。

3 大沢くんの思い

私は亜紀と別れをつけ、教室で大沢くんを待っていた。ガラガラガラ……。

「お待たせ。」爽やかやなう。そこには、大沢くんが立っていた。

「よし！じゃあ行くかッ！」大沢くんは私の手を引っ張った。あれ？どこ行くんだろ……。

「ねえ、この教室なに？」急に大沢くんが止まった。

「理科室だよ。でも今は、だれも使ってないんだ。」

「そうなんだ。ねえねえ、ちよつと話していかない？」

「ここじゃなくても、教室で話せばいいんじゃない？」

「いいから、いいから。」私は、大沢くんに連れられて理科室に入って行った。私たちは、イスに座り、それから一時、他愛もない話

「すると、急に大沢くんの顔が真剣になった。をしていた。」

「俺が今から話すこと、ちゃんと聞いておいて。」
「なんだろ……」

「俺、今日初めて一目ぼれした。」一目ぼれか。青春だなあ。

「相手は？先輩？」

「言っ
てい
い？」

「うん。聞きたい！」

[illegible]

「私？」

「そう。どうしよう・・・。」

「好きです。付き合ってください!」 どうしよう……。でも、大

沢くんは、完璧な男性だと思う。それに亜紀も

「早く彼氏作ってよ」とか言ってたっけ。これから一緒にいると好きになる相手だってことは、なんとなく・・・わかる。

「私によければ・・・。」

「本当? ?」

「うん。」こうして私たちは付き合うことになった。この私の甘い考えが・・・悪夢への第1歩となった。それを気付いたときは、もう遅かったのだ。

4 豹変

翌朝、玄関を出ると……そこには、大沢くんが待っていた。

「おはよ。」

正直、うれしかった。

「おはよう。大沢くん!!」

私は朝は嫌いだが、いつきにテンションが上がった。

私は大沢くんに駆け寄って行った。

すると大沢くんが・・・

「空!! コーラ飲みたい!」

え??? コーラ?

あゝ、私を待ってたら、のど乾いたのかなゝ・・・。

「わかった。ちょっと待ってて!!」

私は近くの自動販売機で、コーラを買った。

「はい。どうぞ!」

「ありがとゝ^^」

大沢くんは、欲しいものを買ってあげた子供のように、可愛く笑っていた。

「行こゝ。」

「そうだね。」

って、え??? 大沢くんは、強引にも私の手を掴み学校に向かった。教室に入ると、女子の目線が痛かった。

こうなることは、分かっていたけど・・・怖い・・・。
すると・・・

「おっはゝ!!」

のんきに私の前に、またもや飛び込んで来たのは、亜紀だった。亜紀はいつでも、周りの目を気にせず、私の味方でいてくれる。

「おはよっっ」

「なにゝさっそくカップル??? 空やるじゃん!!」

「喜んでくれるの?」

「なに言ってるの! 当たり前じゃん。」

すごくうれしかった。私たちのこと認めてくれる人がいたから。

「ほら、突っ立ってないで、のろけ話聞かせてよっ!!」

「う・・・うん。」

亜紀は、私をせかすように席に座らせた。

そして昨日の放課後のこと、今日の朝のこと全部話した。

「ラブラブだねえゝ。」

「まあ〜ね!」

「今日も一緒に帰るの?」

「ううん。大沢くん今日から、陸上部に入るみたいだから、今まで通り亜紀と帰るよ。」

「そっか。やっぱ足速いんだ。大沢くんって。」

「そうみたいだよ。」

「じゃあ、1限目始まるから、またあとでねっ!」

そう言っただけで亜紀は自分の席にいった。

1限目は・・・理科かあ。

私は、理科が嫌いだ。

だから、真面目に授業を受けない。

「空!」

隣にいる大沢くんが、話しかけてきた。

「なに?」

「はい、これ。」

と言って渡されたのは、理科のノートだった。
????

「これがどうかしたの?」

「授業のメモよろしくね。」

はい?なんで、私が?

「そういうのは・・・自分でしなきゃ!!」

「はあ?・・・へえ、俺に逆らうんだ。」

なにこの男!

「なんで、私がしなきゃいけないの?」

「は?空は、俺の奴隷じゃん。」

「は?奴隷???」

「そう。奴隷は、黙って言うこと聞いてればいいの。」

「なんで私が大沢くんの奴隷なの?」

「だって昨日言ってたじゃん。」

「私でよければ・・・って。」

確かに言った。でもそれは、付き合うっていう意味での言葉だった。

「言ったよ。でも奴隷になるとは、言っていないじゃん！」

「言ってなかったけ？俺の中では、彼女〓俺の奴隷なの。」

「そんなこと、聞いてない！」

「今、言った。」

「じゃあ別れる。」

「それは・・・無理！」

「は？なんで？？」

「別れるか、別れないかは俺が決まる。」

最悪だ・・・。

「はい。ってことで、ノートよろしくね。」

「嫌だ。って言ったら？」

「バツがくだるよ。」

ガキかよ！そんなの、嘘に決まっている。

「そんなの信じらんない。はい、返す。」

「へえ。いいんだあ。」

「いいもん！やれるもんなら、やってみなさいよ！怖くなんかないんだから。」

「いいんだね。」

「いいわよ。」

私は絶対！従わないんだから。

5 恐怖

放課後。私は、亜紀いつもより早く家に帰った。

夜、甘いものが食べたくなったので、コンビニに行った。

その帰り、私の家の前に・・・

見知らぬ大きな黒い車が1台、止まってあった。

すると、車から下りてきた、数人の男の人たちが、こっちへ向かって走ってきた。

「え？なに？キャッ！」

1人の男の人に腕を掴まれ、車に引きずりこまれた。

「離して！なんなのアンタ達！！」

怖い……。私は、あまりの恐怖に泣いて叫んでいた。

「あれ？怖くないんじゃないかなかったけ？」

この声……。まさか……。

「こんばんはだねっ！空。」

「大沢くん！」

「おっと、ここでは、ご主人様って呼ばないと。」

「アンタ一体なにもんなのよ！」

今まで私の腕を掴んでいた人が急に……

「お坊ちゃまのことを、アンタだと？」

「は？お坊ちゃま？」

「そうだ。お坊ちゃまは、IT会社社長の1人息子だ。」

すごい……。その社長は、テレビでもよく見ていた。

いわゆる、セレブのトップと言われる人。大沢くんがその息子……。

「分ったかい？俺の可愛い奴隷チャン。」

私はもう、叫ぶ力もなくなっていた。

「離し……。て。」

「離して下さいご主人様でしょ？」

「……。」

言いたくない……。同い年なのに、そんなこと……。

「言わないんだ。やっちゃっていいよ！」

大沢くんがそう言うのと、私の手を後ろに回し、縄で結ばれた。

「やめて！離してよ！」

「空が、いつまでたっても言わないから……。それに今日のバツ。」

バツ……。本当だったんだ……。

「キャッ！」

ビリビリビリ……。

私の服が何人もの男の人達によって破られている。

犯される……。

一瞬にして、分かった。

「久しぶりだな。楽しませてもらうよ。お譲ちゃん。」

1人がそういうとみんな一斉にズボンとパンツをおろした。

「いや……。」

私は、目をギュッと閉じた。

「目、開けてごらんよ。」

誰かがそう言ったが、私は開けなかった。

「開けろって言ってんだろぅが！」

怖いよ。

「従わなきゃ、どうなるか分かんないよ。」

私は、そっと目を開けた。

「いやあー!!!!」

そこには、数人の男の人達のアレがたくさんあった。

「気持ち悪い……。」

「しゃぶってくれる？」

「いや……です。」

「しゃぶれよ!!!!」

「いやで……んっ。」

男のひとのアレが、口に突っ込まれた。

「おお。なかなか上手いじゃん。」

次々に男の人のアレをくわえさせられた後、白い液体を体中にかけるられた。

「今日は、ここまでにしといてやろう。」

今まで、じっと見ていた大沢くんが言った。

「空？」

「なに？」

「ありがとうございますは？」

「言わないと、またされる・・・。」

「ありが・・・とう。ございます・・・。」

「いい子、いい子。」

「はい、これ着て帰んな。」

と言って渡されたのは、スウェットだった。

「はい・・・。」

私はそれを着て車からおりようとした・・・。

すると、1人の男の人が、小声で・・・

「いい？ 忘れないで。お坊ちゃまは、なんだってするんだ。気をつけろ。それと・・・はい。」

と言って渡されたのは、電話番号。

「後で電話して。」

と言って渡された。

私は、無言で車をおりた。

「空！ 明日。学校で！！」

大沢くんがそう言うのと、車が動きだし、あっという間に見えなくなった。

6 知らなかった・・・

家に帰ると、泣きながらお風呂に入った。

体に傷がつくほど、ゴシゴシと洗った。

お風呂から上がり、さっきもらった紙を見ながら、部屋に入った。その紙には・・・。

電話番号と名前が書いてあった。

・・・亮。

私は、電話をかけてみることにした。

プルルルルル…プルルルルル…。プルツ。

「もしもし。空ちゃん？」

「はい。」

「良かった。かけてくれて。」

「あの…。」

「あっ！要件？」

「はい。」

「お坊ちゃまに気持ち伝えた？」

「はい？」

「好きって言った？」

そういえば・・・私でよければとは、言ったけど・・・。

好きとは、一言も言っていない・・・。

「いえ・・・。」

「あゝやっぱり・・・。」

「それが、どうかしたんですか？」

「空ちゃんさあゝ。なんとなくで付き合ってたでしょ。ただ、彼氏が

欲しいから。って。」

当たってる…。

「はい・・・。」

「お坊ちゃん、いや・・・陸はね、小さい頃から好きな女の子だけ、その子の心が読めちゃうんだ。言っていることわかる？」

「いや・・・。」

「つまり、空ちゃんがなんとなく付き合ってたってことも気づいてたってこと。」

「えっ？」

「俺と陸は幼馴染なんだ。だから、陸からよく相談されるの。だから今日も見ただけだったでしょ？俺。」

確かに……。亮くんは、何もしてこなかった。

「はい。」

「陸、いつも告白するたんびに、悲しい顔をして帰ってくる。」

「えっ？」

「もちろん振られた事はないさ。でも、いつも告白したこの心を読むと……。好きではないけど、かっこいいから……。って毎回これの繰り返し。」

「そうだったんだ……。」

「それで今回もだったでしょ？ 陸、初めてだったんだ。一目ぼれしたの……。それで……。今日みたいなことになったんだと思う……。。」

「私、どうすればいいんですか？」

「簡単だよ。陸のそばにいてくれるだけでいい……。怖がらないで……。」

「でも……。」

「無理矢理、好きになれとは言わないよ……。でも、きっと本当の陸を見ていたら、空ちゃんも好きになると思うよ。」

「分かりました。良かった、この話聞けて。」

「またなんかあったら、相談のるから、いつでも電話して。」

「はい。」

「じゃあ……お休み。」

「お休みなさい。」

ブチッ！プープープープー……。

私は、決めた。本当の大沢く……。じゃなくて、陸を見る。って……。

翌朝、私は早めに準備をして、玄関をでた。

「お：はよ。」

と気まずそうに上目づかいで言う陸がいた。

「昨日は・・・」

と言っている陸を無視して・・・

「陸~~~~!!」

と私は陸に抱きついた。

「えっ！空？今、陸・・・」

「言ったよ。それがどうかした？」

「いや：別に。」

「行こッ！」

と私は、陸の手を引いた。

「って・・・待って。」

「えっ？」

「ちょっと話があるんだ。」

「うん：。」

と言って私たちは、学校と反対方向に歩き始めた。

一時歩いていると：ある、川原に着いた。

「ここでもいい？」

陸が私に聞いた。

「うん。」

私たちは2人並んで座った。

「昨日は、その：ごめんな？」

「ううん。」

「怖かったよな？」

「まあね。でも、もう大丈夫。」

「もう、あんなことしないから。」

「うん。私こそ：ごめん。」

「なんで空が謝るんだよ。」

「昨日ね、車から下りる時、亮くんから、電話番号が書いてある紙

を渡されたの。」

「亮から？」

陸は、すごく驚いていた。

「うん。それで…。陸のこと全部聞いた。」

「全部って、全部？」

日本語になってないし…（笑）

「うん。ねえ、陸、私の心読める？」

「……………うん。」

「じゃあ、私今から、喋らないから、私が思っていること当ててみて？」

陸に私の思いを聞いてほしかった。

「分かった。」

「じゃあ…いくよ。」

「うん。」

私は、そっと目を閉じた。

—心の中—

私は、昨日陸のことをいろいろ知りました。

思えば…私は、陸のこと何にも知らなかった。

そして、いつのまにか陸を気づ付けていたの。

ごめんね。陸…。

私、もっと陸のこと知りたいって思ったの。

いばい知って陸のこと、誰にも負けないくらい好きになりたい。って思った…。

こんなわがままな私を陸はどう思う？

嫌いになった？

でも…もう1つだけ、私のわがままを聞いて下さい。

私の前では、本当の陸を見せて。飾らない、ありのままの陸を…。

。そんな陸を好きになりたいから…。

私は、そっと目を開けた。

そこには、涙を流す陸の姿があった。

「私の思ってること、読めた？」

「うん…。十分伝わった。…。ありがとなッ!!」

と言って私の頭を撫でてくれた。

そんな陸の目は、今までに見たことのないすごく…優しい目をして
いた。

私は、泣いている陸に抱きついた。

陸も私を優しく包んでくれた。

「絶対、好きにならせてあげっから。」

「うん。」

そして、体を離し陸は私に顔を近づけてきた。
でも…

「ダメ。キスは、陸を好きになって、私からする!」

「それまで、おあずけ？」

「うん。」

「はいはい…。」

8 私の気持ち

それから…

2ヵ月間、毎日ずっと陸と一緒にいた。

私たちは今、理科室にいる。

「ねえ、陸、目閉じて…。」

「なんで？」

「いいから、いいから。」

「うん…。」

チュッ!

私は、陸にそっとキスをした。

陸が驚いた顔で私を見ている。

「マヂか？」

「マヂだよ。」

そう、私は陸のことが大好きになった。

「よッシャー!!!」

陸が叫びながら私をお姫様抱っこしてくれた。

「キャッ! もうゝ陸ゝハハ」

「あっ! 空、高いところ苦手だったな。ごめんごめん。」

こんな優しいところも大好き。

「なあゝ…。」

「なに…んっ、」

私たちは、もう1度気持ちを確かめ合うように…キスをした。

今度は、さっきと違って深いキス。

「んっ…ハアハアハア…」

「悪い。ついつい。」

「いいけど、もうちょつと時間短縮してくれない? ……死ぬかと思

ったちゃん。」

「はいはい。」

でも、うれしかった。

深いし苦しかったけど…優しいキスだったから。

「なあゝ」

「なに？」

そう言うと、陸は私の肩を掴み見つめあうように座りなおした。

「高校卒業したらさあゝ。」

「なに？」

「その…結」

「いいよ。」

「えっ？俺まだ言い終わってないんだけど。」

「わかるのっ！好きな人の考えてることぐらい。」

「だからって最後まで言わせろよ。」

「いいよ。」

「俺と結婚して下さい！」

ほらね・・・。

「はい…。」

——5年後——

私たちは結婚した。

あの、川原で…。

今、私たちが幸せということを、確かめあうかのように…。

END

（後書き）

「好き」の意味。楽しんでいただけたでしょうか？

皆さんには、大切な人はいますか？

本当に心から「好き」と言える人はいますか？

この小説を読み、少しでもその思いに気付いてくれたらいいなと思っています。

私は、まだ中学生で「本当の恋」というものを知りません。でもこの作品を作っているうちに「恋をしたい」と何度も思いました。

また機会がありましたら、次の作品を作りたいと思うので、その時はぜひ、読んでくださいね^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5424f/>

「好き」の意味

2011年1月4日04時03分発行